

6月15日、我々は6. 15をこのような情況で迎えた。
集会は二回に別れていて、昼の部はペ平連や市民団体が中心で、夜の部は八派共闘や各大学の全共闘が集まって來ていた。

私は夜の集会に参加したが、一年前の6. 15、この時は中核派と革マル派の凄惨な内ゲバが有り、雨に濡れた芝生の上に何人もの負傷者が横わり、呻き声を上げていたのを昨日の事のように思い出した。あの夜、内ゲバの物凄さを目の前にして、上江洲さんの下宿に泊まらなかったらサークルも辞めていただろうし、こうして一年後の6. 15に参加することもなく何をしていったかなあなどと考えていた。ふと気が付くと上江洲さんが来ていない。

昼のデモに参加して、夜も来ると言っていたのだが昼間のデモで疲れて下宿に帰って寝てしまったのだろうと、その時はそんな風にしか考えなかつた。デモのコースは明治公園から青山通りを通って日比谷公園へ向かういつものコースだった。毎週の様に御茶ノ水でカルチャーラン実力闘争を戦い続けていた我々にはちょっと気が抜けたような感じのカンパニア闘争だった。

青山通りでは機動隊の規制も緩やかで、時折ジグザグデモやフランスデモを繰り返しながら進んだ。今頃では、我々の隊列も岡田さんが指揮を取り、常連のメンバー二十人ぐらいが次第にデモ慣れして来て、サークルを中心とした隊列の先頭を行くようになっていた。

私は前列の二、三番目の歩道側にいた。青山通りをかなり進んだ所で、歩道をデモ隊と一緒に歩いている野次馬の中に白いパンタロンを着た一寸場違いな服装の女の子に気が付いた。よく見ると、高校の同級生天本さんだった。声を掛けると彼女も気付き、「ヤー。」という感じでこちらを見た。隣の賀茂君に「知り合いがいるから、ちょっと抜けるよ。」と言って隊列から離れた。夜の白いパンタロンスースのせいもあったが、高校を出てから二年以上経って、彼女はかなり大人っぽく綺麗になった様な気がした。

- 53 -

「さっきから気が付いていたれけど、石川君て変わらないね。」と言った。「少しあんなになつたろう。」言うと、「そうねエー。」と言われてガッカリした。「君もデモに来たの。」聞くと、「いや、私デモって、見た事無いから見てみたかったの。」と答えた。少し生意気な奴だと思ったが、高校の友人とは殆ど会つていなかつたので、同級生の消息などを聞きながら、赤坂見附の交差点に近づいて行つた。

私たちが楽しく高校時代の話に花を咲かせて、交差点を渡ろうとしたとき、国会議事堂の方から待ち構えていた機動隊が「ワア。」と喚声を上げながら、襲いかかって來た。それまではカンパニア闘争で、割りと静かに來たデモ隊は不意を突かれ、交差点付近は混乱状態になつた。彼女はガタガタ震えて立ち止まってしまった。「こんな所で止まつてると、捕まっちゃうよ。」「早く来いよ。」と言って、彼女の手を引っ張つて、その場を逃げた。

さっきまでは生意気な口を聞いてたくせに内心思つたが、青ざめた顔を見るとちょっぴり可愛いなと思った。

百メートルぐらい走つて安全な所まで來ると他の仲間が気に懸かつたので、「デモは見るものじゃない。今度は参加しに来いよ。」と言うと、別れしな「うん。」とうなづく姿は叱られた子供みたいだった。

一時的な混乱も収まり、我々は交差点を過ぎた所で、隊列を組み直し、逮捕者、負傷者も無くそのまま日比谷公園に着いた。入り口付近では散発的な小競り合いが続いていたが、私たちは簡単な集会を行つて散会した。

この夜は天本さんに会つた事で、上江洲さんが来ていない事などケロリと忘れて、ちょっぴり甘酸っぱい気分に満たされていた。

この頃、上江洲さんが見つけて來た兜町の小柳証券で、ボードボーイいわゆる株式の黒板書きのアルバイトを金子さんと一緒にしていた。レシバーを付けて、刻々と変わる株式の値動きを聞き取つて黒板に書くのが仕事だった。株式市場が資本主義經濟を動かしている重要な要素の一つである事は理解していたが、実感は無かった。三十分交替の仕事なので、時間の割に賃金が良かったし、鹿児島出身の受け付けの女の子も美人だったし、社員

食堂の食事がお替わり自由だったし、会社の雰囲気も皆親切だった。そして、何よりもサークルの仲間と一緒に働けたので楽しいアルバイトだった。

翌日の昼過ぎ、会社に電話が掛かってきた。

誰か友達からかなと思いながら受話器を取ると、昨日、昼間のデモで上江洲さんが逮捕されたと、弁護士からの知らせだった。驚いてどうしたら良いのか聞くと、明大ベ平連の鈴木さんという女性の指示を受けるようにとのことだった。金子さんと相談して、会社には上江洲さんはカゼ気味なので、二、三日休みたいと言つてはウソの届けを出して置いて、仕事を終えると急いで皆に上江洲さんの逮捕を知らせた。我々は未だ身内から逮捕者を出した経験が無く、当事者として、どう関われば良いのか誰も知らなかった。

皆であれやこれや言い合っていても仕方がないので、ベ平連の鈴木さんに来てもらうことにした。鈴木さんは小柄で、チャーミングな女性だったが、明大の救援活動を永らく行つていて、多くの活動家が世話をになった。

説明によると、上江洲さんは日比谷公園付近で、デモの最中に逮捕された事。当日は千五百人規模のデモで、逮捕者は七名出た事。状況から見て荒れたデモでは無かったので、二、三日で釈放になると思うが、もし起訴になると拘留も長くなり、下着の用意や面会、親への連絡が必要な事、また保釈金も必要になるという説明だった。鈴木さんの説明で、一応安心したものの、もしもの場合は最善を尽くす事と当面救対の事は彼女の指示に従つて動くことを皆で確認した。

不安の内に三日が過ぎると、上江洲さんはケロリとした顔で部室に帰つて来た。彼の話では日比谷公園の側で、デモが一時混乱した時に逮捕されたが、何もしてい無いので安心していた。丸ノ内署の留置場では泥棒とも話が出来て面白かったし、飯もマアマアで、取り調べの刑事にも沖縄の問題を説明すると、逆に同情され、まんざら悪い所でも無かった。また、ベ平連の救援対策は非常に良かった。今後はベ平連に対する認識を改めなくてはいけないと言って、私たちの心配を外に意氣軒昂だった。

私と金子さんは上江洲さんを連れてベ平連にお礼の挨拶に行って、松岡、秋

- 55 -

場さんなどに会い、この件でのお礼を述べると共に学内の諸情況に関して意見の交換を行つた。その結果、今まで我々が抱いて来た市民主義者というベ平連に対する誤った偏見も解消し、これを機会に一致できる所から、ノンセクトとして共同行動を取る事で、意見が一致した。ノンセクトの隊列が出来た事は、その後、多くの影響を学内の運動に与えることになった。

学内運動の盛り上がりや上江洲さんの逮捕という経緯を経て、皆もバリストへの突入は時間の問題だと考え始めた。

理論活動の場としてのサークルと闘争そのものに関わつて行く運動行動体を分離することになり、三サークルの連合を発展的に解消して、サークルの行動体として、サークル連合協議会（略称、サ連協）を結成する事にした。

政研、歴研は党派に所属している人もいるので、個人加盟となつたが、我マル研はサークルとして全員加盟することにした。それまで情況に乗り掛かる形で、進んで来た我々もサ連協として主体的に学生運動を担う為にサークル内の強固な意思一致を計る必要が有つた。

マル研臨時総会を6月23日に11号館地下のゼミ室で開く事にした。

23日の昼頃から、1部の学生会が記念館で学生大会を開催した。

バリストが決議され、全学でバリケード造りが始つた。

11号館ではベ平連の諸君がバリケードを造り始めた。

6時半から、我々はサークルの総会を始めた。

岡田幹事長から昨年の民青との分裂、今年の新入生獲得、4.28、6.15、の対外闘争、大衆団交等の学内情勢の報告が有り、私は大学闘争の理論的一般論を提起した。上江洲さんが今秋に予定されている反安保決戦に向かた決意を表明した。我々は明大のバリケードを反安保決戦の重要な戦略拠点と捕え、これを守り切る事を全員一致で確認した。そして、総会の決議を持って、マル研はサークル行動体としてのサ連協に全員が加盟し、バリケードストライキに突入する事を宣言し、全共闘を創る戦いを開始した。

この時のスローガンは『創造的サークル。確固たる基盤で対外行動をする科

- 56 -

学的意見を持ち、自己変革を行い得るサークルに！』だった。

今、サークル連合協議会は誕生した。

ザワザワとバリケードを造る音をバックに興奮した雰囲気の中で、マル研臨時総会を終え、直に、我々もバリストに参加した。

11号館ではベ平連の諸君が一階の商学部事務室を占拠してバリケードを造り始めていた。11号館には後何処の組織が入るのか聞きに行くと、今の所彼らだけだと言う返事だった。住み心地の良い部屋を探すと、四階の演習室がソファーも沢山あって良さそうなので、ここを占拠することにした。

鍵を壊して中に入り、部室から旗やヘルメット、ガリ版といった機材を持ち込んで、引っ越しが終わったのは12時過ぎだった。

取り敢えずソファーでベットを作り寝る事にしたが、全館は灯りが光々と点き、あちこちでバリケード造りが続けられていて、ザワザワガタガタと騒がしく、とても寝るどころの騒ぎでは無かった。

私も興奮気味に学内をあちこち歩き回っている内に夜が明け始めた。

19

6月24日、快晴、朝日が登ると共に10月9日まで、百余日に渡るバリケードストライキが開始された。

御茶ノ水の街が最も美しく輝いた季節だった。

占拠した11号館四階の商学部演習室は、大小会わせて三つの部屋が在り、一つはテープレコーダーが多数設置されていたので使用出来なかつたが、残りの広い図書室を寝室にして、狭い部屋を日常的に使用する居間とした。図書室には事務用品が沢山ストックされていたので、非常に助かった。その後のバリケード生活で気付いた事だが、四階は夏も風通しが良くて涼しく、ハエやカモ上って来なかつた。大学側が電気、ガス、水道、電話、エレ

- 57 -

ベーカーを止めなかつたので、生活は至つて快適だった。

11号館は工の字型の建物で各階の部屋の回りをベランダ併んでいる開放的な造りだったが、二階以上に登るのには通常の階段と非常階段が各々一つづつと、エレベーターが二基しかなかつたので、軍事的襲撃には守りやすかつた。その場合、最上階の我々の部屋が防衛拠点に成るので、特に強固なバリケードを築くと共に、ゲバ棒、投石用のビン、石などの武器も多数準備して置いた。

25日、学苑会学生大会が開催された。

既にバリストに入っていたので、代議員が集まらず、大会は全II部の活動家約百名の参加で総決起集会に切り替えられて、バリストが決議され、全II部共闘が結成された。形式的にはこれで明治大学は全学がバリケードストライキに入った。集会としては盛り上がつたが、バリスト突入後のバリスト決議なので、何か陳腐な感じがした。集会の後、御茶ノ水駅まで恒例のデモを行つた。

翌日、M.L派は11号館の一階のコンピューター室と隣の事務室を占拠した。同じ日にI部の商学部闘争委員会も二階を占拠した。

入居者も揃い“バリマンション11号館”も賑やかになってきたところで、週に一度、11号館の管理委員会を持つことにした。管理委員会は主にバリケードを維持して行く為に見張りの時間や順番、トイレなどの掃除の事、軍事的に襲撃を受けた場合の防衛問題を話し合うと共にM.L派によるノンセクトに対するオルグも感じられたが、一般的に規制は無く、何度もワラバン紙の支給や中国茶やジャムのプレゼントが有つた。

サ連協、ベ平連、M.L派、I部商闘委の友好的な関係はバリケード最後の日まで続いた。

明大のバリケードには右翼の襲撃も考えられなかつたし、民青の勢力も低下していた。また、秋の対権力闘争の重要出撃拠点としての意味合いが強かつたので党派抗争も無く、バリケード生活は気が抜けるほど平和だった。

バリケードの中での禁止事項は殆ど無かつた。ただ、他の個人の生活の迷惑になる事、例えば夜遅く酒を飲んで騒ぐ類いの事は禁止されていた。

- 58 -

我々も駅の方や駿河台下など外で飲んでも、バリケード内で酒盛りをする事は無かった。

II部のバリケード配置状況は11号館は前記の通りであった。向かい側の7号館にはブンドのII政闘やブンド系サークルのサ闘連の諸君、政研の田村さんや研連執行部の小宮、三井さん達が居た。その向こうの5号館は青解の上森、百武さんを先頭にII文闘の諸君が居た。ここが一番クラス闘争委員会の数が多く、人数も多く賑やかだった。10号館はやはり青解のII法闘の諸君がいた。その他、地理研や教育研もここに居た。記念館や本館の方には歴研などのサークルとI部の学生会やブンド関東派の影響の強かった青学大の全共闘などの諸君と体育会の人達が居た。短大や大学院には少数だがそれぞれのクラス、研究室の闘争委員会の人達が居た。そして、学生会館にはML派の本部が置かれ、日大全共闘や早大反戦連合などの大学拠点を追われた多くの人達が出入りしてた。

20

一週間ほど経って、我々のバリに文学研究部の土井さんや福留、大里君らがサ連協に参加したいと訪ねてきた。

彼らは一つの場所を占拠するには小人数だったので、この時まで部室で過ごしていたらしい。我々はサ連協をノンセクトの思想性には拘らない個人の意思を尊重する緩やかな連合体と位置づけていたので、参加しやすかったのだろう。我々も彼らを暖かく受け入れた。

文研の参加はその後のサ連協の運動に多くの影響を与えて行った。

土井さんの思想性は吉本隆明的なものとモダニズムが混ざり合っていた様な気したが、彼の様なセンスの持ち主は以前のサ連協のメンバーにはいなかった。福留、大里君らの若い活動家の参加は我々の行動力をより一層高めた。福留君とはその後多くの事を共に行い、彼との親交は今日まで続いている。歴研について触ると、バリケードに入った時、三サークル連合の時から共

- 59 -

に活動して来た歴史研究会にも参加も要請したが、記念館内に拠点を設けた後だったので、そこに留まる事になった。歴研はサ連協の中核的構成サークルにはならなかったが、常に友好的な関係は続いて行った。

学苑会から布団も支給されて、バリケード生活も段々改善されてきた。都心の一等地のマンションの四階に住んでいる様なもので、風通しも良く、夏でも涼しい快適な住家になった。小島君などは下宿を引き払ってしまい、生活の本拠にしてしまう人も出始めていた。通勤も楽で大抵は一駅か二駅、時間にして15分ぐらいでバイト先に通えた。

私は証券会社のバイトを止めて無職だったので、専従員として一日中バリケードに居た。

バリケード生活の一日はバイトに行く人は朝早ったが、私は昼過ぎに起きて夕方までは会議や集会が有れば出席するが、その様な事は希で大抵は本を読んだり、文章を書いたり、他の組織の人々と話したりで、自由時間だった。私は収入が無く、金も殆ど持てて無かったので、皆のカンパで食べていた。バイトをしているメンバーは生活費を差し引いた残りの一定金額をバリケード維持にカンパしていた。食事は昼は金があれば生協食堂でカレーや定食を食べていたが、大抵は食パンと牛乳の日が多かった。皆がバイトから帰ると、一緒に駿河台下の方へ降りて行き、野菜イタメライスか餃子ライスが夕食だった。アテネフランスの側のビヤホールに出かける時も有ったが、ビール付きの食事は滅多に無かった。

夕食が終わって、7時過ぎから12時までの間がバリケードの最も賑やかで、活気に満ちる時間だった。全メンバーが揃い、毎日、討論会や各サークルに別れての学習会が行われ、11号館の管理委員会もこの時間に開かれていた。10時頃には会議も終わり自由時間だった。各自思い思いに読書をしたり、レコードを聴いたり、ギターを弾いて歌を唄ったり、将棋を差したりして過ごしていた。

24時間一緒に暮らし始めた訳だから、自ずと付合いは深くなり自分の生立ちやプライベートな事も語り会える仲に自然に成って行った。

12時を過ぎるとバイトの有る人は寝むり、バイトの無い者は具無しの即席ラーメンを食べて、夜の見張りに立った。季節は夏で見張りは楽だった。

11号館の正面は学館の中庭を学館と11号館がコの字型取り囲んでいたが、裏側は病院や駿台予備校が隣接していて、扉を乗り越えると簡単に侵入することが出来た。我々は屋上から主に裏側を重点的に見張っていた。深夜1時から朝7時まで各組織ごとに3時間交代制だった。見張りの辛い時間帯は4時から7時で、この時間が一番眠かった。見張りが終わると、私の一日も終わり星過ぎまで眠る毎日だった。見張りが朝の7時で終了する理由はその時間になると御茶ノ水の街にサラリーマン達が出勤して来るので、権力、民青、右翼も多くの人前で、攻撃を仕掛けて来る事は無ったからだ。

バリケード闘争が始まった時点では軍事的緊張感は全く無かった。何故なら、明大には組織的な右翼は居無かったし、体育会とも後述する様に敵対関係には無かった。民青も68年のゲバルト以降公然活動は出来なかつたし、力量的にも我々の比では無かった。また、細々ではあったが、大学当局とのパイプも繋っていたので、何かの理由を付けて強制捜査の形で、権力が介入して来る事は有り得たが、直ぐに攻撃して来るとも思へ無かった。

この様に考えて行くと、毎日、見張りに立つ必要は無いとも思えるが、日本という国家の枠組みの内では有るけれど、権力=国家と力の対峙関係に入った時、幾ら情勢が煮詰まって無く、バリケードの襲撃の可能性が無いからと、軍事力いわゆる市民的抵抗能力を欠落させていては、バリケードは維持出来きない。

常に政治的対立関係に有る緒力は、その関係性の中で成立する力=ゲバルトを持つ必要が有るし、また、必然的に持たされてしまうものである。

後日、右翼からの嫌がらせ的攻撃を二度三度受けた時、警察は見て見ぬ振りをしていた。（明大通りの旧学館前にはパトカーが常駐していた。）

我々も警察権力から独立した政治勢力だから当然だと思っていた。

27日の深夜、黒塗りの乗用車が一台11号館前に横付けされ、中から火

- 61 -

炎ビン三本が投げ付けられた。二本が燃え上がりバリケードを少し焦がす程度で消し止められた。この時は、明大全館の灯りが一齊に点き、10分も経たないうちに約百名の武装した部隊が学館中庭に集まつた。車は逃げ去ってしまったが、平和な毎日を送っていても、右翼や権力との不断の緊張関係の中に置かれている事を知らされた事件だった。

全共闘と体育会は67年の第一次明大費闘争の時にはゲバルトを繰り返し双方に大きな被害が出たと聞いていた。体育会も有望なスポーツ選手に怪我をさせても詰まらないし、全共闘も意味の無いゲバルトを行っても仕方がないので、今回の闘争では体育会は全共闘の運動に妨害敵対行動を取らない、全共闘は体育会が使用している施設を封鎖しないという暗黙の了解が双方に出来ていた。

この様な体育会との関係の中で、ユーモラスなエピソードを一つ。

応援団の部室は本館のバリケード内に在つたが、彼等は自由に出入りして活動していた。そして、本館に繋がつて短大の建物が在り、そこは女性だけで、占拠されていた。すると、応援団の諸君が夕食の後、一杯飲んだ勢いで連日の様に“表敬訪問”してくれるのだが、それが甚だ乱暴なやり方で、罵声を浴びせたり、バリケードをドンドン叩いたりで、彼女たちも迷惑だったのだろう。再三、救援を求めてきた。その都度、出かけて行くのだが、我々が着く頃には、何時も聖域の部室に引き上げた後だった。そんな事が何回も繰り返されていると、狼少年の話ではないが「また、短大パトロールか。」と我々も慣れてしまった。

或る日、何時の救援要請で、チンタラと出掛けると、男が一人、棒の様な物を持ってバリケードの前に立っていた。「お前ら、全共闘か。」と叫ぶと、白い鞘を払い、キラリと光る長ドスを構えた。一瞬怯んだが、我々も十五、六人と多勢だったので「貴様こそ、闘争に敵対する気か。」と構えると、男は脅しが利かないを見て逃げて行った。

この夜を境にして“乱暴な表敬訪問”は幸に影を潜めたが、体育会との奇妙

な共存関係はその後も続き、ゲバルトが発生する事は無かった。

6月の末、郵便局への自動読取機導入阻止闘争が戦われた。ブンドから新宿の郵便局が闘争拠点に成るから行かないかと誘われていたが、その時は労働者の闘いだという理由で断っていた。この頃になると、サ連協も組織力と機動性を持った當時三十人ぐらいのグループに成長して来ていたので、各党派がしきりに近付いて来た。三ヶ月ぐらい前から、岡田さんが港区芝の郵便局で働いていて、当然、彼も全通の組合員として闘争に参加していた。芝の郵便局は新左翼の闘争拠点には指定されてなかったが、機械が導入される郵便局の一つだった。導入の当日、夜11時過ぎに岡田さんから応援を求める電話が入った。(11号館では、ML派とベ平連が外線電話を持っていたが、我々は専らベ平連の電話を利用していた。)昨日までブンドに対しては労働者の闘いだから我々は参加しないと言っていたのが、電話一本で意見はガラリと変わり、意義付けはどうでも良いから、岡田さんを助けに行こうという事になった。早速、出動の準備に取り掛かり、私が大袈裟にも軍手、ヘルメット、コーラ瓶各自一本、短く切った鉄パイプを取り揃えていると、上江洲さんが「一寸、待て、今日の闘いは岡田君達労働者の闘いで、我々本来の闘いでは無い。だから、岡田も今日まで黙っていたのだろう。しかし、情勢が緊迫して來たから、支援を要請して來たのだろう。我々はあくまで彼の支援に行くのだから、何も、そんな仰々しい支度は必要無い。もし、必要なら現地で準備しているだろう。」と言いました。結局、乱闘になった場合に備えて、軍手だけ着用して出かけた。私は何時も思うのだが、上江洲さんは活動家というよりもヤクザの親分といった方が似合うのではないかと思える人で、器量が大きいというか行動の際の判断の適切さと人を包み込む優しさに長けた人だった。

文研の土井さんが「上江洲さんには論争に勝っても、結局は負けてしまう。」と何時もぼやいていた。上江洲、岡田さんなどの親分的個性と土井、金子さんなどのナイーブな感性が旨く噛合った事が、サ連協という思想的、理論的には無に等しいグループが明大闘争を最後まで戦い抜けた重要な要素だったと思う。

ベ平連の二人を加えて、総勢十二名はタクシー三台に分乗して芝郵便局へ向かった。

闘争の支援に相手から頼まれて出かけるのは初めてで、深夜の街を颶爽とタクシーで、現地に駆け付けるのは、何処か、ヤクザ映画の一シーンみたいで、気分が良かった。

意氣揚々とタクシーで乗り付けると、郵便局は鉄製の扉が閉ざされていて、物々しい警戒ぶりだった。それまでの通例で、機械の搬入を阻止する為に中に立て籠もっているのが、てっきり労働者側だろうと思い、扉に近付いて大きな声で「明大から支援に来ました。」と言うと、四十才ぐらいのうさん臭いオッサンに窓から「お前ら、何しに来た。」と怒鳴られてしまった。

私たちは要請を受けてせっかく支援に来たのに、何故、怒鳴られるのだろう。一瞬、キヨトンとして居ると、扉の脇から岡田さんが出て来て「そっちじゃないよ。中は管理職だよ。我々は向うで、今、集会をやっているんだ。」と言って、私たちを案内した。

四、五十人の集会では総評から派遣されたらしい、太った四十過ぎのオッサンが盛んにアジっていた。学生運動の迫力あるアジテーションを聞き慣れていた私には、その容姿と共に何か締まらない感じがして、隣にいた金子さんに話すと、彼も「デブのマルキストは信用できない。」と言うので、「私も同感だ。」と言ってしまってから、自分自身を振り返って、(私もデブだった。)「それには、僕も含まれるのか。」と言って、ムッとする、「いや、君は別だ。」と言った。我々のこんなやり取りを聞いていた回りの人達もクスクス笑い出してしまった。

暫くしてオッサンのアジテーションが終ったので、金子さんが岡田さんと一緒に

緒にオッサンの所に闘争方針の打ち合せを行った。

今日は労働者の闘いだから、学生の諸君は支援部隊として動いてもらいたい。指揮権は労働者側が持ち、ピケットの前面は彼等が固めるから、總て労働者の指示に従って、学生部隊はピケットの最後部に入つてもらう。機械が搬入されるのは3時か、4時頃になるので、それまでは個別に集会を持ってもらって、ピケを組む時は知らせる。という内容で、話を聞いて来た。

彼の言う事は一応スジが通っているし、我々としても今日は岡田さんの支援という事で来たと言う事で、報告を承認した。

我々も彼等から少し離れた所で集会を持った。しかし、今更、話す事も無かったので、バリケードや学内の事に関する雑談をして、知らせが来るのを待っていた。

時々、あちらの集会の様子を見に行くと、色々な人が熱っぽくアジっていた。何か違和感を感じたが、この何かはよく解らなかった。

4時近くになって、「ピケを組むので来るよう。」と指示して来た。

郵便局の通用門前に行くと、既にピケは出来上がっていて、とても最後列に入れる状態では無かった。やむなく、全通の組合員のピケの最前列の更に前で、我々はピケットを組んだ。これで暴れられると内心喜んだが、そんな我々の気持ちを察したのか、さっきのデブオッサンがしつこく自分の指揮に従うようにと言って来た。

ピケを組み終えて15分も経つと、先ず、乱闘服では無く、警察官の制服を着た機動隊がやって来た。彼等は少し離れた所に待機しているだけだった。やはり、これは全通の闘いで、労働者の闘いだからだろう。何時も我々学生を取締まる時と違って態度もずいぶんソフトだった。指揮者が解散するようになって来たが、罵声と「ボリ公帰れ！」のシュプレヒコールで答えると、それ以上は何も言わず、その場に黙って、立っているだけだった。

次に、5分も経たないうちに、日通の大型トラック二台が大きな荷物を積んで、五十メートル手前で、停車した。

いよいよ来たかと、我々も強くガッチリと、ピケットを組み直して身構えた。すると、今まで建物の中に居た管理職のオジサン達が飛び出して来て、ハン

ドマイクで型通り解散するように警告するやいなや、ピケのゴボウ抜きに掛かった。しかし、四十がらみのオジサン達が寄ってたかって、掛かって來ても我々の敵では無かった。逆に、顔や腹を蹴り上げられてしまい、中にはメガネを飛ばされる者も出る始末である。私も親父の様な年のオジサンを蹴飛ばすのだから、可哀相な気もしだが、向こうもかかって來るのだから仕がない、嫌なら、止めればいいのにと考えを合理化して蹴っていた。そんな、小競り合いを暫く続けていると、いよいよ、待機していた機動隊がやって來た。これからが本番かと、我々も身構えて横を見ると、例の総評のデブオッサンと私服が何やらゴソゴソ話し合っているではないか。

形ばかりの抵抗と言っても、最前列の我々が殴られて、ラインが崩れた所で「止め、今日の闘争はここまで、ピケを解いて総括集会を行うから、公園に移動するよう。」と言うのである。私は一瞬ア然としてしまった。岡田さんなど二、三人が逮捕されているのに、ピケは戦うことも無く後方から崩れ始めた、ピケを解き、我々も公園に行くと、デブオッサンが「今日は善く戦った、闘争に勝利した。」などと勝手な御託を並べ始めたので「ふざけるな。何が勝利だ。」と食い下がったが、彼はこの様な事には慣れているのか、我々を無視してアジを続けた。

日通の大型トラックは管理職のオジサン達の大きな拍手に迎えられて、芝郵便局の中に入つて行った。

私が感じていた違和感の正体が、今、はっきり解った。最初から、プログラムは組まれていたのだ。だから、事がプログラム通りに進行したので、デブオッサンは勝利したと言ったのだ。

何か無償にやりきれない氣怠い敗北感を皆が嘴み締めていた。しかし、同時にバリケードに入ってから未だ闘争らしい闘争を戦つていなかつたので、肉体的には心地好い疲労感が有った。

幸いに、岡田さんらも直ぐその場で釈放された。複雑な思いを抱きながら、朝の街をトボトボと我家の明大バリへ全員無事に引き上げた。

岡田さんはこの闘争を契機に郵便局を辞めた。

後日、全通から五千円の金が交通費の名目で、我々に送られて來た。

郵便局の闇いから二、三日経った頃、記念館で全共闘主催のヤクザ映画会がオールナイトで上映された。

当時、ヤクザ映画のオールナイト興行が大流行で、私たちも暑いバリケードを抜け出して、池袋に在った文芸座にオールナイトを見に行つた。

出し物は高倉健の“網走番外地”や“昭和残侠伝”的シリーズが多かった。文芸座には各大学の活動家も涼を求めて沢山見に来ていたので、高校時代の友人や他大学や明治の活動家ともよく会つた。

休憩時間のロビーは一寸した各大学バリケードの情報交換の場でもあった。記念館で上映されたのは東映の鶴田浩二主演の“総長賭博”などだった。

音響効果が悪いのとヤジや掛け声が多くて、セリフは良く聞き取れなかつたが、各館から抜け出して來た活動家が多く、場内の雰囲気は非常に盛り上がって映画会は大盛況だった。

場内は暑かったので、コーラやあんパンが飛ぶ様に売れていた。

映画会の二日後、全共闘本部からサ連協に、コーラやあんパンの利益で購入した真新しいヘルメットが十個支給された。

22

7月8日頃、私はバリケードでの不規則な生活で夏カゼをこじらせて、家に帰つて来ていた。

7月10日深夜、父親が急死した。死因は心臓発作らしいが、今ではよく知らない。

学生運動を続けながら、家庭の経済生活を支えるのは困難だし、第一大学を続けられないかもしれないなど、悲しむ前に多くの事が伸びて来て、多くの事を考えさせられた。上江洲さんや岡田さんに相談すると、君もこれからは大変だから運動は止めた方が良いと言つた。

葬式やその後始末を付けて、母親の一時的な精神的ショックも過ぎ去つてしまふと、私もする事が無く、ただプラプラしているだけだった。すると、母

- 67 -

親が「家でプラプラしてゐるぐらゐなら、学校に行け。」と言う。

私は待つてましたとばかりにバリケードに戻つたが、以後はゲバルト要員からは外れて、主に救対関係の任務に就いた。

7月末に再びバリケードに戻ると、情勢は少しづつ変化していた。

7月11日、大学当局との最終的な大衆団交が開かれたが、何等の進展も見られなかつた。中川学長以下が居直つた形で、大学当局は明大全共闘を以後交渉相手として認めないと通告してきた。それまでも大学側は全共闘を正式に認めた事は無かつたが、自治会から権限を委譲されている機関と言う曖昧な形で交渉していたが、ここに大学側とのパイプは完全に切れてしまった。

我々全共闘内部にも大きな変化が起き始めていた。

ブンド内部では4.28沖縄闘争の総括を巡つて、関東派と関西派の対立が深刻になり、分裂しそうだと言う噂が以前から流れていた。

7月6日、和泉校舎でブンド内部の大きな内ゲバ事件が起きた。

この事件はブンド内部の問題で、直接的には我々と関係は無かつたが、明大ではI部のブンドは関東派であり、II部のそれは関西派が握つていて。ブンドの内部抗争は10年以上明大学生運動の第一党派として君臨してきた党派の解体を意味した。それは自動的に明大全共闘指導部の主要な部分を解体して、多くのブンド活動家を消耗させ、その結果、II部関西派の7号館のバリケードは消滅し、本館に居た関東派のI部ブンドや青学全共闘も消えてしまい、明大全共闘の闇いに多くの影響を与えた。

関西派は赤軍派として、10.10の全国全共闘総決起集会に登場するが、その後は、非公然の組織として我々の前から消え去つた。

私が父親の死から大学に戻つた時は、これら一連の出来事の後だったので、バリケードは至極平穡だった。

生活の日常性が定着して来て、夜の見張りは続けられていたが、当初の緊張感は無くなり、読書する者、ギターを弾く者と、思い思いの時間を楽しんで

いた。マル研の“帝国主義論”の学習会も進んでいた。

明るい話題としてはマル研の小杉君と荒井さんのカップルが誕生した。

地下鉄の駅から未だ目も開いて無いメスの子犬が拾われて来た。

我々は子犬に“ローザ”と名付けて飼うこととした。姿は白と黒の斑で小型の雑種だった。最初、何を食べさせれば良いのか分からなかった。人間と同じだろうと、小島君がミルクと哺乳瓶を買いに行った。大の男が薬局の人に「お子さんは何か月ですか。」と聞かれて、恥ずかしかったと笑っていた。初めは人間と同じ様に3時間ごとにミルクを与えていたが、二週間も経つと、目も開き、歯が生え、歩くようになった。すると、何でもよく食べ、我々が大切に食べていた、パチンコの景品のコンビーフは全部彼女に取られてしまった。ローザはたちまちバリケード中のアイドルになった。

二、三日、姿を消したかと思うと、何処かの部屋でお世話になっていた。

動物は外に5号館で永田君が猫を飼っていた。この猫はかなり大きくて、ローザは何時もこの猫に追いかけられていた。ローザはバリケード育ちにしては心優しく、武闘派では無かった様だ。彼女の存在は大いに皆の気持ちを和ませ、重要な会議の席や学習会にも一人前に参加していたし、一日中、バリケードの中を自由に飛び回っていた。

バリケードは犬や猫にとっても自由な空間だった。

明大の全共闘運動にも新しい展開が始まっていた。

ブンドの崩壊から、一時、指導性を失っていた明大全共闘はML派、ブンド関東派、（生田地区のブンド情況派は無傷で残った。）青解、中核派を中心に行なって再編成され、8月上旬、全明全共闘を結成した。ML派の本間さん、ブンド情況派の横谷さんが指導していた。議長にはML派の人が成了った。ここで面白い事は私が全明全共闘の議長の名前を忘れてしまっている事である。指導、被指導という関係は既に薄れていったし、全国全共闘連合も各大学が夏休みなので大きな対外闘争も組めず、内ゲバもブンドの事件以降無かった。バリケードの維持は連絡協議会的性格の各館の管理運営委員会で充分だった。

- 69 -

サ連協の運動表現として、我々も機関誌を発行する事になった。

小島君を中心に発刊準備が進められ、8月11日に創刊号を発行した。

我々の中には未だテレが有ったのだろう。機関誌の名はどうゆう訳か“水虫”に決まった。機関誌といつてもワラバン紙にガリ刷りの粗末な物だったが、我々の考えを対外的に知らせるのに大いに役立った。少し引用が長くなるが、サ連協運動の源始的意味を含んでいると思うので、水虫“創刊の辞”を全文引用する。

「創刊の辞」

（全明治）の闘う学友諸君！そして、先進的な労働者、市民の皆さん！

6月23日のパリスト突入以後、あまりにも長い時が過ぎてしまった。我々は今日、ここにサークル連合協議会（以下サ連協）よりの堅い連帯と熱情を込めて厳かに創刊のアピールを送り届けたい。

我々、サ連協に決集する、サークル員は、東大、日大闘争が切り開いた地平——全共闘運動を継承し発展させる部分として、この明大バリケード闘争に初めて、闘士としての生命を宿した。

それ以来、我々はこの明大闘争が只単に大学立法粉碎の為の闘いでないことを認識した。何故なら、政府ブルジョアジー、国家権力がまさに70年安保の重要な政治課題として、大学問題（紛争の処理）を捕らえているからに他ならない。そればかりではない、我々は現在の大学が政府ブルジョアジーの為の一機構にすぎない幻想共同体であることも知った。学生は知識の技術者としてのみ存続が承認されている今日、情況は、我々に反抗し、抵抗し、叛逆、叛乱すること教えたのだ。学友諸君！しかしながら、我々はこの勝利なき闘いの代償が、現体制内では到底、保障されないことも充分に知っている。だからこそ、我々はこのバリケード闘争を大衆運動を革命的により強固なものとして位置付ける中で全ての戦うサークル員の連合体としてサ連協を創出したのである。

我々は個々の全ての実存をかけてこの闘いに挑戦し、サ連協の戦う主体の確立をもって、その実態を形成しなければならない。なぜならこの機関誌に於

- 70 -

いて、バリケード闘争の過程でこそ、最も有効性を持つからである。全学友諸君、同時に、同時に、我々は明大闘争がいかに困難であるかを、自覚しつつ、戦う諸君との連帯を拡大強化し共に戦線を確立するために、この機関誌を諸君に送りたい。そして我々はここに宣言する。

「平和」「自由」「民主主義」のバーゲンセール、欺瞞的な「戦後民主主義体制」に叛旗をひるがえし、僕等「幸福」を敬遠しよう。一切のブルジョア秩序に敢然と「果し状」を叩き付け、来るべき時のために我々の持ち得る凶器を準備しよう。

今から振り返って見ると、文章も論理も支離滅裂な感じだが、混濁とした中にパトスとナイーブな感性は読み取ることが出来るのではないだろうか。

23

8月17日、大学措置法が施行された日、朝6時を期して中大のバリケードに機動隊が突入した。

この事に関して、我々には苦い思い出が有る。

この日、朝の4時から7時までの11号館の見張り番はサ連協だった。しかし、我々も平和な日常の中で慣れが出て来ていたのだろう。暫く前から、見張りをサボっていた。6時過ぎ、気持ち良く眠っていると、電話のベルがけたたましく鳴った。今頃何だろうと、ツツツツ言いながら、受話器を取ると、いきなり、電話の主は「バッカヤロー、今、何が起きてるか、知ってるのか、中大に丸機が入ったんだ、直ぐに中庭に集合しろ。呑気に寝てる場合か。見張りはサ連協だろう。」と一気に捲し立てられた。「すみません。」と謝り「直ぐ、行きます。」と言って、受話器を切り、皆を起こした。

同時にバリのあちこちも騒がしく成って来た。

5分後に、我々も気恥ずかしい思いを持って、中庭の緊急集会に参加した。

- 71 -

8月でも6時頃はまだ暑くはなく、秋の気配がほんのり感じられる爽やかな風が頬に心地良く、見上げれば、青空が朝日のオレンジ色と混ざり合い、精氣の入る前のマロニエの葉は少し萎れながらも青々していた。

朝のラッシュには間があり、御茶ノ水の街は静かで、美しかった。

眠りから急に起こされてポンヤリとした頭に朝の清々しさの中で見る御茶ノ水の風景が印象的だった。

周囲の静けさを破って、集会のマイクの声がマロニエ通りに響いた。そして、中大の方から、低い嫌なあの戦いの音が地を這う様に微妙に聞こえて来た。

集会を開いたところで総勢六十名足らずでは、どうすることも出来ず、ただ、「バリケードを強固に守ろう！」だとか、秋の戦いに向けた決意が空々しく流れるだけだった。中大に関係の有るセクトには事前に知らされていたらしく、そう驚いた様子も無かつた。集会は何をするでもなく、8時頃に散会した。我々はまた部屋に戻って寝てしまったが、さすがにこの一件以後はバリケードの失われる日まで、見張りはサボル事無く続けた。

中大のバリケードが陥落して、秋の闘争が近付きつつあるという実感を持ったが、明大バリケードの平和はまだ続いていた。

“水虫”第二号を発刊した。

“水虫”創刊号でサ連協はとは何かを初めて語った。従って、創刊号ではサ連協の存在を表明するだけで良かった訳だから、長々と引用した、ロマンチックな創刊の辞や闘いの総括的な我々の総括を載せるだけで、バリケード内の各党派、闘争団体からは批判を含みつつもかなりの反響が有った。

第二号では現在闘争を戦っている主体として、政治運動の必然的帰着なのだが、『何故、サ連協なのか。』『何故、全共闘の中でサ連協を作り闘うのか。』『何故、ノンセクトなのか。』『他の闘争団体とサ連協はどこが異なるのか。』と言った、最も答にくいが、重要な課題に対する解答を我々自身も感じていた。この時期に我々自身の存在意義の検証を成し得た事は、その後のサ連協の運動と闘争に大きな成果をもたらした。既に、サ連協の諸個人の人間関係は上江洲さんを中心とした家族主義的な強い絆で結ばれていたが、さ

らに思想的にも各個人を強くして行った。

第二号で我々は初めて、政治と文化、党派とノンセクトの問題を取り上げる事になり、私は『し的総括し論』という小文を載せ、その中で私なりに明大闘争の質をMし派の本間さんの文章を批判する形で展開し、特に、東大、日大闘争が切り開いた地平の意味を問うた。昨今、党派、無党派に関わらず、やたらに両大学闘争の切り開いた地平を受け継いだと、我こそが繼承者であると言わんばかりの言い方が氾濫していたが、その質に対する検証は殆ど行われてなかった。闘争の質を『それは生きるという人間が持っている生命維持（肉体的に、精神的に）という宿命の上に加えられた、体制による疎外への我々の生命から発する、非常に個人的な“怒り”だと思う。非常に不明確な形で我々は生きることによって加えられた“怒り”を共有していると思う。』と書いた。この様な共有点の見方は、党派の指導の下でしか学生運動を開拓出来なかつた人には、それなりに新鮮な感じを持たれた様だった。党派に関しては私自身の中に未だ幻想が有つたので、批判としては不充分だった。また、この辺が当時の明大ノンセクトの限界でもあったのだろう。小文の終りは次の様に結ばれていた。『セクトとは情況の創造者であり、提起者であり、指導（創造と提起）者として存在する。』

サ連協も“水虫”二号に於いて、初めて自らの存在を表明したが、自己に対するは厳しい批判、洞察を行っても、党派や全体の運動に対するそれは、まだささやかで遠慮がちだった。

我々に対する党派の見方は真面目に運動しているグループだし、まあ、好きに言わせて置けば良いだろう程度だったが、我々は一步、一步、戦う者としての闘いの質を個人としても、組織としても深化させていた。

9月中旬にマル研は信濃学寮で合宿を行つた。

何時もながら、我々の合宿は学習会と野球と酒盛りの三つで成り立つたが、この時も御多分にもれずだった。

情勢に関する討論と“帝国主義論”的学習会が行われた。

- 73 -

野球になると、これはもう高校時代、野球部で甲子園を目指した岡田さんの独壇場で、彼の率いるチームが必ず勝った。勝敗は別にして日頃スポーツに縁の無い生活を送っていた我々は、とても気持ちの良い汗をかいた。

夜は毎日酒盛りで、マル研家族主義を大いに讃嘆した。この時、上江洲さんが空手の型を披露したのだが、間違えて賀茂君を本当に殴ってしまったのが、唯一のアクシデントだった。スキヤクや白権の中に入ると心が安まり、いつ来ても八ヶ岳の雄大な優しい姿が在り、信州の新鮮な空気がとても美味しい、一時、バリケード生活から解放された楽しい三日間だった。

9月下旬、中大のバリが陥落した後、中部地区で唯一残っていた拠点、明大には多くのバリケードを追われた他大学の諸君もやって來た。また、故郷に帰っていた人も戻って來たので、バリケードも活気が蘇って來た。

同時に権力の介入もそろそろ始まるなと言う予感を誰もが抱き始めた。

9月24日、全学の教職員集会が開かれるという情報が入った。

当日、和泉校舎に集まり、会場の八幡山グランドに先制攻撃を仕掛けるべく準備を整えたが、我々の動きを察知した学校側は突然集会を中止した。

我々はヤレヤレと思ったが、集会の中止を一番苦々しく思っていたのは権力だったろう。権力は秋の闘争が春の4.28の再現となることを恐れていた。逆に、我々にとっては首都中枢を制圧するには、どうしても明大、中大、法政大などの権力中枢に近い出撃拠点が必要だった。その為に中部地区に唯一残っている明大のバリケードは我々、権力、双方にとって、日増しにその重要性を増して来ていた。

9月30日、日大共闘の大きな闘争が明大、御茶ノ水を舞台に予定され、日大の部隊を先頭に明大、中大などの中部地区的大学全共闘の総力を擧げ、駿河台から神保町一帯にゲリラ、遊撃戦を戦う事になった。

この日の戦いはそれまでの日大共闘の戦術的パターンを打破するとともに、来るべき秋期街頭実力闘争へ向けた、戦術的実験の意味合いも含まれていた。

- 74 -

この闘争を恐れた権力は30日未明に我々に対する先制攻撃を掛けて來た。

29日の夜、明日、権力がバリケードに介入するという情報が入った。我々は謄写版などの最低必要な物を持って、一時的に立教大に避難した。30日の昼頃、戻ると、バリケードはきれいに撤去され、室内は破壊され尽くし、布団の中にまで催涙剤が撒かれ、茶碗でも一つ一つ丁寧に壊すという念の入れようだった。予期していた事とはいえ、その破壊の丁寧さに「さすが、プロ。」と変なところで感心してしまった。しかし、我々が心配していた最悪の事態、ロックアウトは免れた。権力は望んでいたのだが、まだ、大学当局の意思が固まって無かった様だ。早速、室内の掃除に取り掛かり、夕方に迫っていた闘争の準備を急いだ。

集会は3時過ぎから、学館中庭と記念館に別れて始まった。

私は集会が始まる頃、御茶ノ水の街を後にした。

後で、皆に聞くと、サ連協部隊の活躍は目覚ましく、神保町の交番の奇襲に成功し、半日前、我々の部屋に行った警察権力の破壊に対する御礼を十分に御返した。戦いの場所が御茶ノ水の街であれば、そこは我家の庭であり、路地一本一本までも知り尽くしていたし、また、3ヶ月間のバリケード生活は一人一人の人間的な絆を強固にし、また、自主講座や合宿や“水虫”の刊行を通じて、培われた思想性は精神的にも、我々を一人前の戦闘者に育て上げていた。

サ連協の戦い振りは、広く学内外の諸組織からも注目された。

9.30の闘争を契機として、いよいよ、大学当局も弾圧の腹を固めたらしく、学内の動きも慌ただしくなって來た。その動きに呼応して、機動隊もジローの通りに常駐する様になった。以前から、パトカーやジープはよく留まっていたが、今は装甲車五台の常駐体制を引き始めた。

夏休み明けと同時に大学当局は10月4日八幡山グランドで全学集会の開催を予定して、全共闘に対する弾圧に乗り出して來た。

我々も9.30の闘いを果敢に戦い勝利していたし、9.24全学教職員集会を流した後、大学当局が次に打ち出してくる当然の方策として、予想もしていたので慌てる事は無かった。

3日の代表者会議で全学集会の断固粉碎の方針が再確認され、4日は約五百人の動員を持って、和泉校舎に集まり実力闘争を戦う事を決定した。

10月4日、和泉校舎に着くと、多くの部隊が三地区から続々と集結していた。全学集会は午後1時から開催予定になっていたが、集会場の大教室には刻々と八幡山グランドから状況報告が入り、「既に、体育会や民青の連中が演壇の回りを取り囲んでいる。」と報告して來た。この様な状況に我々全共闘は先ず五十名の行動隊を私服で先発させて、演壇を占拠した後、武装した本隊を持って一挙に集会を粉碎してしまう作戦を立てて、行動隊を直ぐに出発させた。1時間ぐらい経つと「演壇は占拠したが回りを民青や体育会に取り囲まれて、危険な状態で、後、どのくらい持ち堪えられるか判らない。」と行動隊から言ってきた。報告を受けて、本隊も直ぐに出発する事になり、校庭に整列して、まさに出発しようとした時「八幡山駅からグランドに通じる道には約三百人の機動隊が待機していて、武装したままグランドに着くのは困難だ。」と報告が入った。我々は武器を置いて出発した。

八幡山グランドは京王線の明大前駅から四つ先の八幡山駅から歩いて10分ぐらいの所に、回りを閑静な住宅地に囲まれ、多くの体育施設や体育会の合宿所を併設して、野球場とラグビー場の二つのグランドが在った。安全の為か二つのグランドは三メートルぐらいの土手で仕切られていた。土手を背にして演壇が設けられ、集会はラグビー場を使って開かれていた。

隊列を組んで、インターを歌いながら駅を降りると、待ち構えていた機動隊が有無も言わせず、サンドイッチ規制に出て無理やりグランドと反対方向に歩かせた。我々も行動隊が何時まで持ち堪えられるか心配だったが、両脇をガッチリと固められてはどうする事も出来ず、機動隊をヤジるのが精々だった。彼等はヤジる我々を時々、小突いて、グランドに近付けない様に引き摺り回しておいて、集会を終わらせる作戦だった。

幸いな事に八幡山付近は住宅街だったので、道が狭く機動隊の装甲車や指揮車といった自動車は入れなかった。我々は四列の隊列を組んでいたので、更に道の狭い所に来た時、機動隊のサンドイッチの壁が左右二列から一列になった。その時、先頭でデモを指揮していたM・L派の本間さんが「今だ、突破しろ！」と叫んだ。

同時に我々は前方を固めていた二十人ほどの機動隊に襲いかかった。住宅街の小路では彼等も動きが取れず、一溜まりもなく蹴散らされてしまった。

その際、今まで小突かれたお返しに、一発パンチが入ったので気分が良かつた。機動隊の壁を打ち破った我々はグランドへ向かって、一目散に走った。八幡山に来たのは初めてで、グランドが何処なのかは全然知らなかったが、町の辻々には全共闘のレボが立っていて、我々を誘導した。

5分近く走って、野球場の裏手に着くと、土手の向こうからは大勢の人のどよめきや喚声が聞こえて来た。金網を壊し、野球場を横切って、一気に土手に駆け登り、上から見下ろすと、先発した行動隊は体育会や民青に取り囲まれて小競り合いを演じていたが、形勢は多勢に無勢で、今にも占拠した演壇から追い落とされそうだった。

それを一般学生が遠巻きにして見ているという格好だった。

ちょうどその時、土手の上に明大全共闘や各闘争委員会の旗が翻り、我々本隊が到着した。さながら、西部劇の一シーンの様に、インディアンに包囲された幌馬車隊を騎兵隊が救出に來た格好だった。

我々の姿を見て、体育会や民青はたじろぎ、逆に、行動隊の諸君は元気付いた。遠くで見ていた一般学生は大きな拍手で我々を迎えた。常に一般学生には裏切られる存在の我々だったが、こうして拍手で迎えられると、我々も單

- 77 -

純だからヒロイズムが撞き立てられ妙に嬉しくなった。

全共闘旗を先頭に隊列を整えて、土手を駆け降り行動隊を取り囲む体育会や民青に中に突入した。彼等は我々の勢いに怖じ氣付いてしまい解散してしまった。

グランド内でジグザグデモをひとしきり繰り返した後、我々は演壇を再占拠して、全学集会を全共闘の集会に切り替えて、一般学生の圧倒的支持の下、再度、無期限のバリケードストライキを確認した。

学長か理事長を捕まえて自己批判させようと探したが、とうとう、彼等は一度も姿を見せず、ただ、スピーカーを通して、「本日の全学集会は中止した。」と叫ぶだけだった。

集会を終えて、意気揚々と引上げたが、この日の主役は一般学生であり、その成果はやはり彼等の拍手の中に消えて行った。

10月6日、大学当局は72時間の期限付で、退去命令を突き付けて来た。10.4全学集会は大学当局と権力が結託した我々を叩き出す為の一つのセレモニーだった。

7日、サ連協機関誌“水虫”三号が発行された。

小島君の編集後記がこの時の我々の気持ちを素直に表現していると思う。

「サ連協機関誌“水虫”3号をお届けします。」この言葉もマンネリ化しました。何か他の言葉を探さなくては

ローザは増え大きくなっています。一度、三日ばかり帰ってこないときがありました。その時は皆で探しました。けれど、とうとう見付からなかったのです。ところがある日、突然、写真学院の人が抱いて戻って来ました。皆大喜び、でも今度は、部屋を汚すというので、嫌がられるようになりました。そんな存在なのかもしれません。

ついに、10月となりました。11月まで後僅か、来るべきものが来たという感じです。

何も言うことは有りません。

- 78 -

もう、そろそろバリケードともお別れです。でも、心のバリケードとはお別れしたくないものです。

間もなく、そのバリケードが試される時に突入します。そして、各自が動揺を来した時に思い出して下さい。

明大のバリストを。真夏の太陽の下で行った、大デモンストレーションを。

そして、サ連協の機關誌を。…………

また、闘争の中で会いましょう。

6日から、直ぐに、我々は大学院のバリケードの構築に取り掛かった。

9.30に機動隊が乱入した時に彼等は十トントラック三台を用意して来て、バリケードを造る機材を運び去ってしまった。5号館や7号館、9号館から機材を運び、また、大学院の研究室に僅かに残っていた、机や椅子、本まで使って、バリケードを造ったが、機材不足であり、機動隊の包囲と監視の下、常に緊急事態に備えながらの作業だったので思うに任せなかった。

7日の夜、駿河台地区の代表者会議がML派の部屋で開かれた。

本間さんを議長にして会議は進められたが、さすがに緊張した空気が流れていた。この夜の会議の議題は差し迫った権力の弾圧にどの様に戦うのかだった。平たく言えば、バリケードの徹底抗戦を行うか否かだった。

我々ノンセクトと党派との意見は大きく分れた。党派、特に、広島大や岡山大で徹底抗戦を戦ってきた中核派や明大闘争を主力として戦って来たML派、ブンド関東派も党派の面子が掛かっているので、徹底抗戦を強く主張した。

青解は強く主張はしなかったが党派としてやはり徹底抗戦を支持していた。

我々サ連協などのノンセクトの各闘争委員会やペ平連は、徹底抗戦は意味が無いと反対していた。現在の我々に実力闘争でバリケードを守り切れる力は無かったし、運動の継続性という意味からも、大衆の居ない所での実力闘争は戦術的に勝つ自信が無ければ意味を持たないというのが、我々の意見だった。会議は平行線のままで時間だけが流れて行った。

我々ノンセクト側にも権力に対して、一矢報いたいと言う想いは有っし、これまでセクトが運動のヘゲモニーを握っていたという経緯から、彼らの意見

を押さえる事は出来なかった。会議に重い空気が籠り始めた時、中核派の人から、妥協案が提案された。全共闘の決死隊はセクトから出すとして、恐らく権力の攻撃は朝6時頃から開始されるから、決死隊の諸君が7時半まで、持ち堪えられれば御茶ノ水は朝のラッシュに入る。そうなれば、労働者、学生、市民を巻き込んで、ゲリラ戦を開戦して、カルチュラタン闘争を組めば、決死隊の諸君にも脱出のチャンスが有るし、闘争のプロパガンダとしても高い意味が有るという事だった。

我々の反対意見はこの妥協案で退けられ、強行意見が主流を占めていった。私もあるのバリケードでは2時間も持ち堪える事は無理だと思うと、同時に、もし旨く事が運べば、一大闘争が組めるかもしれないとも思うのだった。

この日の会議で、決死隊は党派を中心として志願者を募るとして、全共闘本隊は最大動員を掛け、御茶ノ水で解放区闘争を戦うという戦術方針を採択した。火炎瓶は既に生田校舎で造られて、運び込まれていた。

8日、バリケード全体が一日中慌ただしかった。

サ連協も夕方までには撤収の準備を整えた。不必要的書類は焼却し、最低必要な備品以外は各サークルの部室に分散して戻し、ガリ版など持ち運び出来る備品は上江洲さんの目白の下宿に移した。

撤収の作業が一段落すると、私は急に一人になりたくて、ローザを連れて御茶ノ水の街を歩いた。顔を拭く風は、夏の暑さの面影を微かに残しながらも心地好く、一面の空の青さを受けてマロニエの葉は緑濃く、西に傾いた陽射しは真っ直ぐにバリケードを赤く染めていた。明大通の方からは市民生活の人や車が吐き出す騒音が海鳴りのように聞えてくるが、マロニエ通りは人影も無く静かで、飽きもせず佇んでいた。

夏に文部省に掛けたデモ、全明全共闘の成立を賭けて党派間で紛糾したデモ、ローザと遊んだ日々、林君のギター、夜明けまで語り合った人生、革命論、自主講座、ふざけ半分の軍事訓練、それらの想い出が積み上げられたバリケードに一つ、一つ刻み込まっていた。

夜になっても、大学院のバリケード造りは続けられていたが、昨夜までの様な騒ぎは収まり、各建物の灯りは光々と点いているのに静かな雰囲気がバリケードを包んでいた。

その中で各々の闘争団体単位で明日の闘争方針の確認や今後の運動の進め方を巡る会議が持たれていた。サ連協も全体会議を行って、今夜は都内に残された数少ないバリケード拠点だった立教大に撤収し、明日、そこから御茶ノ水に出撃すると言う、スケジュールと当面の運動方針は全共闘に主体的に関わり運動を盛り立てて、秋期決戦を戦い抜く事が再確認された。また、当面は上江洲さんを中心にして、私の家の電話を使って連絡を取る事にした。

会議が終り、撤収行動への集合時間にはまだ間があった。誰が言い出すとも無く、バリケードの最後の夜だからパーティをやろうという事になった。

酒を飲むわけには行かないでの、それじゃお茶でと言う事になったが、

9. 30で機動隊に奪われてしまって、何も無かった。ML派は毛派だし、彼らの所なら中国茶ぐらいは持っているかもしれない、お茶を分けて貰いに行くと、彼らも会議を終えて、明日の決死隊の諸君の為にお茶の会を開くところだと言って、ジャスミン茶と中国製のジャムとクラッカーを分けてくれた。（ML派と言えば、毛派の教条主義で、私は思想的には好きになれなかったが、人間的には非常に誠実な好人物が多く、人間関係も家族的でゲバルトの強いセクトだった。一度、炭谷さんの出所祝いに招かれた事があるが、バリケードの中だからと、お茶とジュースの会だったが、楽しい席だった。）電気を消して、蠟燭を立てて、残っていた総ての缶詰を開けて、ML派からのお茶で、ささやかなパーティーを開いた。

10時頃、バリケード内の全員は学館の中庭に集合して、全体集会を持ち、決死隊の諸君を激励して、最後にインターナショナルを合唱して撤収した。

10月9日朝6時、快晴、権力の弾圧は形式的な退去命令の伝達から始まった。

今まで、我々の要求を常に黙殺し続け逃げ回っていた大学当局が、機動隊の暴力を後ろ盾に威風堂々、弾圧の為のメッセンジャーボーイとして、我々の

前に初めて姿を現した。全共闘決死隊から彼等への返事は語るべき全てを託した火炎瓶の炎となって返された。同時に大学院の搭を取り開んだ放水車からの放水が始まり、5号館に待機していた機動隊がバリケードに突入した。決死隊は火炎瓶と投石で激しく抵抗したが、如何せん、9. 30で一度、権力の介入を許した後、機材不足の中で、急造されたバリケードは直ぐに機動隊に破られてしまった。

30分の戦闘の後、七名の決死隊員全員が権力の手に落ちた。

7時、全共闘本隊が御茶ノ水駅に着いた時には全てが終わっていた。

大学の回りは機動隊の厚い盾の壁が取り囲み、一步も近付けなかった。

建設業者が既にロックアウト用の扉の組み立てに取り掛かっていた。

その手回しの良さに、只、唖然とするばかりだった。

我々は立教大に引上げ、権力に逮捕されてしまった七名の決死隊員の行動を無にしない為にも、明大闘争をバリケードを失っても闘い抜き、そして、明日の10. 10全国全共闘連合の総決起集会を皮切りに11月佐藤訪米阻止に向けた70年反安保決戦、秋期決戦闘争を明大全共闘の総力、全力量を賭けて戦う事を再度決意した。

御茶ノ水の街が最も美しく輝いた日々は終焉した。

10月10日、全国の大学全共闘が日比谷公園に決集した。

多くの大学の全共闘は既にロックアウトを受けて拠点を失っていたが、昨日から我々明大全共闘もまた彷彿える全共闘の仲間入りをした。

明大全共闘は千数百人の大動員を得て、一大デモンストレーションを行ったが、我々バリケード闘争を終始戦って来た者にとっては、昨日の御茶ノ水の闘争には百名足らずの部隊しか動員出来なかった事と考え合わせると、何か割り切れないものを感じていた。

地下に潜っていた赤軍派がブンド関東派との内ゲバという形で、初めて姿を現した。

秋期決戦に向けた一大カンパニア闘争として、現在多くの大学がロックアウトに有るという困難な状況にも関わらず、一万数千人の大動員が出来たということは学生総体の中にあるエネルギーは失われる事無く、盛り上がりを見せながら秋期決戦へ動き出しているのが、我々一人一人に確認出来た。

こうして、慌ただしい一週間が過ぎ去ると、我々は解決しなければならない問題を数多く抱えていた。

常にサークルの部室という何時でも自由に使用できる拠点を大学に持つていた。そこは事務所であり、印刷所であり、集会、会議室でもあった訳で、今こうして大学を追われると皆が一同に集まれる場所が無かった。二十人もの人数が集まれる部屋を持っている者は誰も居なかった。サ連協もメンバーが集まれない事には組織としての機能が働かない訳で、動員が掛かっても連絡が不徹底になるし、人間一人一人は弱い存在だった。それでなくとも一步外に出れば平和で豊かな市民社会が手を挙げて我々を取り囲んでいたし、一方では執拗な権力の恫喝が不断に加えられていたので、常に意思の疎通を計る必要が有った。

主だったメンバーは毎日、若しくは一日おきに、夜、上江洲さんの下宿に集まって議題を討論して各々が分担して結果をメンバーに連絡した。

70年安保秋期決戦に入り、サ連協も今までの様なカンパニア闘争から実力闘争を戦える組織に変貌していた。幸いに今まで大して負傷者や逮捕者を出さずに来たが、今後の闘争では重傷者や逮捕者がいる事が必然的に予想されるので、救援活動の整備も進めなくてはならなかった。

これらの諸問題を解決する為に、サ連協全体の責任者には上江洲さんがなり、明大共闘本部との連絡、調整は岡田さんと小島君が担当し、そして、救対は私が担当する事になった。

- 83 -

救対としては、先ず、サ連協メンバーの名簿を作った。

名称：明治大学サークル連合協議会

コードネーム：金城（サ連協の暗号名で喫茶店などの伝言板に記入する時に利用した。名前の由来は沖縄独特の姓）

メンバー

マルクス主義経済研究部

上江洲善教	岡田 年生	野村 忠恕	金子 貞夫
樺沢 謙一	奥山 慶一	平佐田	新井 和枝
佐藤 博	石川 彰	賀茂 栄造	沢部 博幸
荒井 敬子	小杉 秀紀	照谷 通成	大西みはる
富樫 武			

政治研究部

小島 保雄	林 安夫	近藤美智子
-------	------	-------

文学研究部

上井 洋介	福留健二郎	大里 泰行	吉田 弘子
黒川			

以上二十五名であった。

救対は半連の救対組織に入る事にした。

岡田さんや小島君の努力で、全体会議の出来る場所探しが実を結び、フランス文学研究会の名前で、都立の三田図書館の会議室を借りて全体会議を持てたが、三回目には我々の素性がバレてしまい、その筋のお達しにより学生さんには貸せないと体よく断られてしまった。それから、新宿の労政会館、豊島区役所出張所の会議室と、軒々と渡り歩いた。何処でも二回までしか借りられず、三度目には必ず「学生さんはねエー。」と断られた。

権力はアパートローラー作戦などで、我々を市民社会から締め出す手立てを次々と打って来ていた。

全体会議が持てないのは運動を進める上で、大いにピンチだった。

サ連協の事務局会議は、目白の上江洲さんの下宿で行われていた。
会議の後、目白駅前のパチンコ店の二階に在った“藏王”という喫茶店に行
き、コーヒーを飲んでから、よく目白の街を歩きながら話をした。
重要な話をするのには、下宿や喫茶店などの個室的な所よりも公園のベンチ
や街を歩きながら話す方が安全だった。

特に喫茶店はデカが多く来ているので厳禁だった。
目白の街は、賑やかな目白通りを挟んで高級住宅地が広がる静かな緑の多い
街で、学習院大学も在り道行く人も何處かお洒落な感じがした。
その様な街とは絶対に折り合わない話題を口にしながら夕暮れの街を散歩し
た。山手線の外側の目白駅と高田馬場駅の中間に在る断層の坂の辺り、ロゴ
ス英語学校付近の住宅街が小さい頃から自転車の散歩道で、私は特に好きだ
った。

皆の生活も次第に苦しくなって来ていた。
人々、我々はⅡ部の学生で家庭が裕福な者は居なかった。
仕送りも無いか、有っても僅かだったので、皆アルバイトをしていたが、決
戦を前にしてアルバイトどころではなかった。特に、岡田さんや小島君の様
にバリケード闘争と共に下宿を引き払った人は行く所が無かった。岡田さん
は上江洲さんの、小島君は政研の先輩の下宿にそれぞれ転がり込んでいた。
上江洲さんなどはどうせ読まないし、これから暫くは別荘暮らしだと言って、
持っていた本を全て売り払って、生活費に充てていた。時々、小島君は我が家
に飯を食べに来ていたが、彼は痩せているのに私より沢山食べるので、母親
が腹せの大食いとアダ名していた。
秋期決戦を前にして、金の無い事は余り気にならなかった。

全体会議の会場確保の問題はひょんな事から解決した。
マル研の賀茂君の家が巣鴨でトンカツ屋を営んでいた。彼の店“とん平”が

- 85 -

閉店して掃除が終わる10時過ぎから11時まで“とん平”を会場として使
うことが出来る様になったので、全体会議は11月の闘争が終わるまで“と
ん平”で行われた。賀茂君は会議の時に“とん平”的余りの肉と野菜で美
味しい野菜イタメライスを作ってくれた。

皆にとっては御馳走であり、二重の意味で“とん平”は良い会議場だった。

“とん平”にとっては、迷惑な事であったろう。

全共闘の活動者会議は主に生田寮で開かれていた。
農工学部の生田校舎は小田急線の生田に在り、学生寮の生田寮が敷地内に建
てられていたので、ロックアウトが出来なかった。明大全共闘はここに拠点
を移していた。

活動者会議は10.21闘争をどの様に戦うのかが中心議題だったが、どち
らかと言えばセクトのアジェーテーションが主で、余り意味が無い会議が多かっ
たが、我々の様な独自に闘争を組めない小さな組織にとっては拠点を失った
今、全体的な情報が必要だった。また、我々と同じ様な状況に置かれている
様々な闘争委員会の力を汲み上げる為に各党派の思惑が錯綜した面白い会議
でもあった。

私の任務だった救対の会議は主にMし派が拠点を移していた中大の代々木
寮で開かれていた。
Mし派がⅡ部段階の救対をセクト的に集約しようと動いたが、我々サ連協は
救対に関してはベ平連に集約して貰う事に決めていたので、この動きには加
わらなかった。その他には逮捕時における一般的注意や包括的な下宿処理の
方法、親元への連絡時の注意などの技術的な指導が主に行われた。

10.21を目の前にした、17、8日だったと思うが、ベ平連の鈴木さ
んと連絡を取り、救対に必要なサ連協の名簿を渡す事になった。
名簿には、メンバー各自の住所や実家の住所、電話番号、及び、サ連協の組
織的な連絡方法などが記入されていたから、会計簿（サ連協には無かった）

と並んで、絶対に権力の手に渡せない書類だった。

鈴木さんと代々木の喫茶店で、会う約束をして家を出ようとした時電話が鳴った。「私は急用が出来てしまい、時間に間に合わないと思うので、代りにハルミちゃんに行って貰いますから、書類を彼女に渡してください。」とだけ言って、鈴木さんは電話を切ってしまった。ハルミちゃんを知らないし、困ったなと思いながらも指定された喫茶店に向かった。

この時期、権力は我々に対する弾圧を異常なまでに強めていた。

学生運動の活動家然として街を歩くとやたらに職務質問を受けたり、令状も無しで荷物を開けられたりした。

私はプレザーの上下に身を包みアタッシュケースを持って、映画プログラムの中に名簿を挟み、こざっぱりした身なりで出かけた。

指定された喫茶店に行くと、店内は空いていて二、三人の客が居るだけだった。

私は例によって、店全体が見渡せて、入口が良く見える奥の席に着いた。

喫茶店でのこの様な席の取り方は、自然に身に付いていた。

コーヒーを飲みながら店の中を観察すると、私服のデカが居た。デカの特徴は、先ず、彼等は服装や年齢が喫茶店に不釣合で、大抵は一人で、必ず入口に近く、電話に近い席を取り、30分程度で交替しながら見張っていた。

約束の時間を5分程過ぎた時、フリルの付いたブラウスにピンクのカーディガンを羽織った美しい女の子が一人入って来て、近くの席に腰を下ろした。

代々木ゼミあたりの予備校生かなとも思いながら、彼女の方を見ると、彼女も時々私の方を見ていた。内心、彼女がハルミさんかな、でも、持ってる書類が書類だし、やたらに声を掛けて聞くのも、デカらしいのが居るのでまずいし、と思いながら、時々、彼女と視線を合わせてモジモジしていた。

30分もそんな思いでいると、鈴木さんが店に入って来て、私と彼女の双方を見て「どうしたの。」と言った。やっぱり、ハルミさんだった。でも、ベ平連にこんな美人いたかなと改めて見てしまった。

私もハルミさんも色々な思いの込められた視線には触れず、ニッコリ笑いな

がら必要な書類を渡し、店を出てベ平連との連絡方法を簡単に打ち合せて別れた。

緊張と殺伐とした気分の連続の日々の中で、この日の事はちょっとコソバユイ思い出として心の隅に残った。

10月19日、夜、10時半から“とん平”で、サ連協は10.21を前にした最後の全体会議を行った。

小島君から明大全共闘の作戦指令が伝えられた。

明大全共闘は行動隊を二つに分け、一般の行動隊は常盤橋公園に決集して、昭和薬科大に設置される全共闘連合の指揮下に入り、首都中枢に向かたゲリラ闘争を戦う。また、特別行動隊は明日、生田寮に決集し、和泉地区より甲州街道を制圧しつつ一気に新宿に突出して、68年の10.21を一般市民と協力して再現する。その間に各党派の決死隊が、霞ヶ関の政府中枢を制圧するという作戦計画だった。

今から振り返って見れば、この様な作戦指令を出されても、実現不可能な事と笑ってしまう内容だったが、この夜は誰も何も言わなかった。

サ連協としては特別行動隊を出すか否かという事になった。

何時のもの会議ならワイワイガヤガヤで議論百出するのだが、この日の会議は沈黙が議長を努めていたようだった。

とうとう、ここまで来た。夏のバリケードを造った日から、秋の決戦に向けて、秋の決戦に向けてと総ての力をある時は出し、また、ある時はその為に蓄積させ、だからバリケードを失っても、それは秋の決戦の前哨戦だからと思って来た。今、秋の決戦が明後日に迫っていた。

上江洲さんが静かに語り始めた。「小島君の報告の通り、我々は今日まで明大全共闘の一員として戦って来た。そして、我々の総力を賭して戦う時が来た。今まで、何度も確認して来た様に明大全共闘の行動隊として、この闘争を最後まで戦い抜くべきだと思う。そして、次に特別行動隊の事だが、我々は自由な諸個人の集まりだから、党派の様に出さなければならないという義務は無い。だが、全力で戦う以上、特別行動隊は戦略、戦術の作戦上必要だ

と思う。だから、サ連協としては志願者が居れば出すことにしよう。特別行動隊への志願者は当然、逮捕される確率が高い、そうなれば、暫くは別荘暮らしになるのだから、自分の事をよく考えてから決めるように。」しばらくして、「では、特別行動隊への志願者を募りたい。志願する者は手を挙げなさい。」と言った。

上江洲さん、福留、小杉、黒川君の四人が手を挙げた。

黒川君の志願はまだ若いので無理だということで却下された。

上江洲さんにも「リーダーの上江洲さんが逮捕されたら組織として困るから辞めてほしい。」と皆が言うと、「バカ、リーダー云々言う前に俺はこの闘いに賭ける為に、今日まで戦って来たんだ。サ連協も皆の力でここまで来し、俺が居なくてもやって行ける。この様な形も皆を引っ張って来た者の一つの帰着であり、第一、俺が行かないで、福留や小杉を送り出せるか。それよりも、残った者達で我々の後の事を頼む。」と言った。

皆、ただ黙って頷くばかりだった。

その後、戦術の話し合いに入り、特別行動隊は明日より生田に行き、明大全共闘の指揮下に入り、他の行動隊は常盤橋公園に集まって、私の家を連絡所にして、昭和薬科大に設置される全共闘連合の指令部から作戦指令を受ける事にした。私と近藤さんが連絡係りになった。

会議が終わると、賀茂君が出陣の杯と言って、皆にトンカツと一杯づつの酒を注いだ。上江洲さんが「後の事は頼む。」と言うと、急に胸が熱くなるのを感じた。

誰も、何も喋らず、静かな酒だった。

26

10月21日、雨は降らなかったがドンヨリとした曇り空だった。

テレビに映し出される霞ヶ関も新宿の街も機動隊の厚いジュラルミンの盾に覆われ店は固くシャターを下ろし静まり返っていた。

- 89 -

作戦開始時刻の正午、常盤橋公園に決集した約千五百人の全共闘連合部隊は銀座方面に向かって進撃を開始した。機動隊は容赦の無い催涙弾の水平撃ちで我々を迎えた。正午から始まった戦闘は約2時間に及び一進一退を繰り返したが、党派の中核戦闘部隊が各所で検問に引っ掛かり、火炎瓶などの武器はとうとう届かなかった。次第に押し捲られて神田方面にチリジリになって後退した。私はチリジリになった皆を一度、集める必要を感じ、神田の喫茶店に集まるように指令した。昭和薬科大の指令部に電話を入れると、返事は芝方面の部隊が進出中だから、再度、銀座方面に攻撃に出てほしいとの指令だった。皆に御茶ノ水の街を迂回して、気象庁の方面から残存部隊を集め、攻撃に移り、芝の方面から進出して来る部隊と合流するように指示した。3時を過ぎても、新宿の街は静かだった。デパートや商店は全て臨時休業で、機動隊と木刀を持った自警団が街の辻々を固めていた。それでも、エネルギーと或る種の想いを秘めた群衆が次第に集まり始めていたが、戦闘の核となる、全共闘、党派の中核部隊は未だに現れなかった。

4時過ぎ、御茶ノ水を迂回して霞ヶ関に向かった部隊の攻撃も失敗した。この時刻になると、全共闘の指令部も部隊の状況を掌握出来ず、指揮能力を失っていた。何処にも千名単位の火炎瓶などで武装した戦闘の中核となる部隊は存在しなかった。そして、その幻の部隊を求めて多くの部隊と群衆があちらこちらを彷徨っているのが現状だった。

三度の攻撃と打撃で明大全共闘行動隊サ連協の部隊も皆がチリジリなり、次の行動の指示を仰いで電話は掛かってくるが、再度の決集地点を見出だす事は出来なかった。ここに至って、事実上の指揮能力は失っていた。

取り敢えずは全員無事だった。そうして、一年前の今日を思い出した様に、チリジリになった全ての部隊も人々も次第に新宿を目指し始めていた。皆に新宿へ向かうように指令し、8時を持って闘争を終了するように伝えた。夕闇が街を覆い始めた頃、続々と各地の戦闘を戦い終えた各部隊と何かが起こるのを期待している群衆が昨年の新宿闘争の再現を目指して集まって来ていた。しかし、新宿の街は変わっていた。今日、我々を待っていたのは冷たく降ろされたシャッターと、木刀を持って路地の奥まで、我々を追い回す自警

団だった。あの騒乱の中でも、店を開け続け追われた我々を暖かく迎え入れた飲み屋や路地、何時も我々が愛し続けた新宿の街は何処に行ってしまったのだろうか。

競争的な小競り合いを繰り返しながら、秋期決戦第一幕、10. 21闘争はその幕を降ろした。

10時過ぎに小島君が高田馬場から歩いて私の家に戻って来た。

それまでに他の人達からも連絡があり、8時を期して全員闘争現場から撤収した。全員の無事を確認した11時を持って、私の家のサ連協指令部もその任務を終えた。

サ連協特別行動隊の三名は明大生田寮に決集し、21日の朝、明大和泉校舎に移動し、生田から別便で届く武器を待ったが、火炎瓶などを積んだトラックは生田を出ると直ぐに検問に引っ掛かり到着しなかった。

和泉校舎は機動隊に十重二十重に取り囲まれ逆封鎖されてしまい、とうとう、特別行動隊は校舎から一歩も出ることは出来なかった。

霞ヶ関解放区も新宿解放区も遂に幻と消え去り、ここに60年型街頭実力闘争は終りを告げようとしていた。

凶器準備集合罪の適用以降どうしても戦闘部隊と武器の運搬が別々になり、両者のドッキングが必要になったが、権力は徹底して武器の運搬部隊を潰し、中核となる戦闘部隊を拠点に逆封鎖した。街頭では商店主達のプチブル性に訴えて自警団を組織して我々を追い払った。

この様な情況の中で我々も遂に爆発点を見出だせず、10. 21闘争を敗北のうちに終わらせてしまった。

10. 21の敗北は我々に少ながらぬ動搖を与えた。

翌日、全員の無事を確認する為に“とん平”に集まった我々は、皆一緒に沈んでいたが、まだ、11月の佐藤訪米決戦が残されていた。

再び気力を奮い立たせて、1ヶ月後の闘争の準備を始めた。

市民社会は我々を益々異端者として疎外し、権力の弾圧も厳しさを増して来

- 91 -

ていた。喫茶店などには何時も私服のデカが張り込んでいたし、店員もうさん臭い目で我々を見ていた。集会場も学生さんは一切お断りという状態だった。この様な情況の中で拠点を失った各大学の全共闘は次第にその動員力を落として行った。党派に対しては権力の容赦の無い事後逮捕が続いていた。

幸いに、明大全共闘は生田寮に拠点を持っていたし、我々サ連協も上江洲さんの下宿の事務局と“とん平”的集会場を持っていたので、連絡などに支障を来す事は無かったが、少しづつ精神的には追い詰められていた。

この様な情況の中で、上江洲さんだけは何時も元気で、「レールが引かれて動き始めたのだから走り抜くより仕方が無いだろう。」と言っていた。

明大全共闘も組織を維持する為に、度々、生田寮で活動者会議を行ったが、終始セクトのプロパガンダで終った。

党派も表面的には10. 21闘争を勝利したと機関紙などでアジっていたが、内部では敗北を深刻に受けとめていた様子だった。

11月の初め、明大全共闘は組織のタガを締める意味からも高田馬場の“山楽ホテル”で全体集会を持ったが、とうとう、党派間の調整が着かず、明大全共闘しての統一方針は出なかった。

サ連協は11月闘争を明大全共闘としてML派と共に闘うこととした。

再び、あの“とん平”的夜が巡って来た。

小島君から簡単に戦術上の報告がなされた。

16日の午後から蒲田駅近くの公園に決集し、羽田空港占拠に向けて、68年の羽田闘争を再現して空港機能をマヒさせて、佐藤訪米を実力阻止するというものだった。皆、押し黙って、小島君の報告を聞いていた。

今となっては、10. 21の敗北でこの作戦が成功するとは誰も思ってはいなかった。ただ、明日の闘いの為に半年に渡る闘争を戦って、来る所まで来てしまったという想いと、最後まで戦い抜くという決意が絡み合って、皆の胸に去来していた。

上江洲さんが再び決死隊を募りたいと静かに言って、自ら手を挙げた。一瞬の沈黙の後、小島君と賀茂君が手を挙げた。

決死隊はM.L派の攻撃隊と共に火炎ビン闘争を行い、本隊はM.L派の別動隊として戦う予定だった。

1ヶ月前と同じに、全てが同じに、皆の前にコップ一杯の酒が用意された。

一年間に渡るサ連協の運動は遂にここまでやって来た。

無言の内に酒を飲み干しながら、我々は言葉を越えて連帯した。

11月16日、蒲田駅に決集した我々は、第一京浜国道を越えて羽田に向けて進撃を開始した。蒲田から羽田への道は京浜急行羽田線に沿って、町工場街が続いている。工場街も今日は静まり返り、我々を拒絶していた。

機動隊も街中での混乱を恐れたのか阻止線は張らず、我々を牽制しながら羽田へと誘導して行った。工場街を抜けて橋を渡れば滑走路が広がる飛行場を目前にした所まで来ると、機動隊の厚い阻止線が待ち構えていた。

ゲバ棒と火炎ビンで、波状攻撃を繰り返すが、機動隊は催涙弾の水平撃ちと高圧放水車の着色放水で答えた。

全ての情念を込めて火炎ビンを投げた。その都度、彼等の放水は正確に落下地点に向けられ、それに呼応して催涙弾の水平一斉射撃が続いた。顔や腹を押さえて路上に倒れる者が一人二人と続いた。彼我の戦力の差は4. 28の時よりもはっきりしていた。火炎ビンを投げ尽くした我々は投石を始めたが、投石に役立つ石は殆ど無かった。

工場のブロック塀を壊して投げるのだが、その様な動きを察知すると直ぐに機動隊は催涙弾を撃って攻撃してきた。急に総崩れになる事は無かったが、少しづつ確実に押されていた。

67年の様な、ゲバ棒と警棒で肉弾相撲の白兵戦の場面はもう無かった。

ゲリラ戦には欠かせない群衆もいなかった。街も我々を拒絶して静まり返っていた。もうそこには、佐世保や王子、68年の新宿、今なお続く三里塚の連帯は無かった。我々は孤独な戦いを続けて、気が付くと多摩川沿に敗走していた。一部の部隊は平和島方面に逃げたが、機動隊に包囲されて多数の逮捕者を出していた。多摩川の土手で再度部隊を集めて攻撃を試みたが、大勢は既に決していた。

- 93 -

17日午前8時、再び多摩川の土手に決集し、羽田を目指したが、機動隊の壁は厚く上手から一步も出られなかった。党派の精銳部隊も消えて、武器となる物は何も無く「佐藤訪米を実力阻止するゾー！」のヒプレシコールだけが空しく多摩川にこだました。

9時過ぎ、我々の想いとは無関係に、日米安保条約の自動継続とその後の日本の東部アジアでの霸権を確立する為に、訪米する佐藤栄作を乗せた特別機は、羽田を飛び立って行った。

我々の秋期決戦は終った。

27

17日の夜、戦いの中でチリジリなっていた各自の無事を確認する為に御茶ノ水の喫茶店“丘”に集まった。岡田さんと賀茂君が打撲の軽症を負った外は、逮捕者も無く全員無事だった。しかし、6月から秋期決戦に向けて総てを賭けて来た我々にとって、敗北の中に今日を迎えた事は一人一人の中にやりきれない虚脱感を植え付けていた。また、半年間よく闘い抜いたという満足感と、運動の再構築をどうするのかという想いが交錯していた。

授業が間もなく再開されそうなので、“ロックアウト粉碎闘争”を明大全共闘として戦う事を確認したが、これとて当面の処置であり、その先の戦略、運動方針は皆無だった。

皆、疲れていた。日頃、次々と意見を出して、皆を理論的にリードして来た土井さんもさすがに声も無くただ黙って想いを噛み締めていた。

上江洲さんを始め地方から出て來ていた人たちは既に生活の基盤を失っていた。バリケード期間中はバイトが出来たが、10、11月闘争の期間は本など持てる物を売り尽くして、生活していたのが現状だった。

岡田さんや小島君は住む所も無くしていた。

- 94 -

闘争が終わってホッとする間も無く、生活の問題が我々を襲って来ていた。ちょうどこの時、M.L派の人の紹介で、浜松町のメッキ工場に職が見付かった。上江洲、岡田、小島、林、小杉の面々は工場に住み込んだ。メッキ工場といつても街の零細企業で、宿舎は段々ベットの汚い所だったが、市民社会が我々暴力学生をバージしようとしていた時だけに、皆が一ヵ所で働けた事は幸運だった。

上江洲さんから学生運動を止みたいという申し入れが有った。
「今日まで皆を引っ張ってここまで来たが、一応、自分の役割は秋の闘争で終わったと思われる所以、学生運動を止めて自分自身を考えて見たい。」との事だった。

上江洲善教、沖縄出身で、父親を戦争で亡くし、顔も知らないと言っていた。彼は暫く浪人していたらしく二十六才だった。経研からマル研に移行する時のサークルの幹事長として民青と聞い。それ以降、サ連協の運動をリーダーとして常に引っ張って来た。理論家では無かった。

彼のアジテーションを聞く事は一度も無かった。

沖縄の海を背負って来た様な明るく、楽天家で親分肌の人だった。

聞いの日々が遠く過ぎ去った時、彼の口から直接聞いた事だが、酒は飲めないのに無理して我々と飲んでいた事や、バリケード闘争の時も、時々、バリケードを抜け出して川崎堀之内のトルコに出掛けていた事などを話してくれたが、その頃彼はそれらの事をおくびにも出さなかった。彼のそんな所が親分としての魅力だった。

上江洲さんは私の人間としての成長に大きな影響を与えた人だった。

我々を立派な活動家に育て、サ連協を明大の学生運動の中で、一つの勢力にまで育てた事、特にサ連協内部のおおらかで、家族的な親しい人間関係の形成に彼の人柄が大きく影響していた。

我々は気持ち良く彼の引退を受け入れた。

- 95 -

11月闘争が終わると、学生運動の退潮は否めないものとして、我々の上に覆い被さって来た。

権力と癡着した大学当局は待ってましたとばかりに、バリケード闘争も大衆団交で確認された諸事項も何も無かったかの如く、授業を再開して來た。

これまでの闘争の中で我々が問い合わせてきた事に何ら答える事も無く、ただ、我々の物理的な力量の低下を見越した無原則的な授業の再開を認める事はできず、断固粉碎する方針を固めた。

大学の周囲は高い鉄板の扉で囲まれ、出入口には駅の改札口の様な検問所が作られ、ガードマンや職員、体育会の学生達がそこを固めて学生証を提示しないと学内に入れなかつた。それまで、明治大学は人の腰の高さぐらいのフェンスがあるだけで、出入りの自由な校舎だった。

党派の活動家の多くは逮捕されていて、常時、二百人以上の動員力を持ち、カンパニア闘争なら千人以上の動員力を誇った明大全共闘も、今、ここ錦華公園に集つたのはたったの二十人だった。

寒空のもと、我々には旗もヘルメットもトラメも何も無かった。そして、行き過ぎる学生達も何か嫌なものを見る様に小走りに走り去つて行った。

今まで、我々を支えて來たエネルギーは何処へ消えてしまったのだろう。

勇ましいアジテーションも寒風に搔き消されて、沈みがちだった。

そのうちに誰かが「幾ら、こんな集会を続けていても意味が無いから、検問所に突っ込もう。」と言いつ出し、7号館の検問所に向けてデモに移つた。

我々を見詰める一般学生の目は冷ややかだった。7号館や11号館のベランダから我々を見下ろす目の中に、一ヵ月前まで共に戦つて來た多くの人の姿を見出だした時、怒りは覚えなかつたが、哀しみが込み上げて来て、これで我々の運動も終わつたんだなと思った。

最後の怒りを検問所にぶつけると、丸太とベニヤ板の検問所は見る見る内に壊れていったが、それは我々自身が壊れて行くのを見ている様な気がした。

勝ち誇つた者の余裕なのか、大学当局もガードマンも体育会の学生も、そして、あれ程までに神經質に対応して來た権力も全く我々を無視していた。ひ

としきりエネルギーを発散させて、検問所を破壊し終わると、我々にはもう為すべき事が無くなっていた。

気が付くと、全く我々を無視するコンクリートの壁とそれ以上に冷やかな目、また目、多くの目に閉まれていた。

完全に御茶ノ水の街は私を拒否していた。

私は駅に向かって走り出した。

「私の闘いは終りだ。」「二度とこんな街に来るものか。」と心の内で叫びながら。

涙が止めどもなく頬をつたって、御茶ノ水の街も涙の中に溶けていった。

69年12月、風は冷たく、御茶ノ水の街を容赦無く吹き抜けていた。